黒部の休日

黒部・薬師沢～雲ノ平(2020/8/4-7)

Ｈロ、Ｈ麻

６月１９日から県境を越える移動の自粛が解除され山へ行けるようにはなったが、山小屋の営業がはたしてどうなるのか心配であった。解除後早々に南アルプス方面の山小屋は今シーズンの休業を宣言してしまった。

どこも手探りでやっていくしかないコロナ禍。その後、北アルプス方面では予約制で定員の半数だけ泊めるというスタイルが案内された。少ないキャパシティに対して土日周辺の予約がどんどん埋まっていく。

そんな折り、パートナーとなったＨ麻が夏休みに入り、お互い特別休暇をもらっているのでここで使うのはどうかと考えた。行く先の候補として目を付けたのは僕の大好きな黒部である。５日間休めるので薬師沢から高天原まで足を伸ばしてみたいと考えたが、そこまで歩くのは自信がないとのことだったので、薬師沢ベースでのんびりするというプランを提案し同意をもらった。

本格登山が久しぶりのＨ麻は「大丈夫かなぁ」と心配していたが、１日目の行程を太郎平までとすれば何とかなるはずである。

Ｉ．折立から太郎平へ

前日のうちに富山入りし、朝一番で亀谷から有峰林道に入った。平日、それも火曜日の朝だというのに折立の駐車場はいっぱいで臨時駐車場の方へ回ることになった。山小屋が半分の人数制限をしているにもかかわらずこれだけ駐車しているということはみんな山小屋を使った登山を待ちわびていたんだなぁと感じた。

８：０５、折立を出発。８：１０のバスで着く人たちが多いだろうけれど、どんどん抜かしてもらいましょう。こちらはゆっくり歩けばいいんです。

僕にとっては勝手知ったる『太郎坂』、休憩場所にあるアラレちゃんを紹介して、三角点では剣岳の雄姿をご披露する。いい調子で高度を稼いでいた。良く晴れて赤黒黄のポールを越えると有峰湖の眺めも清々しかった。

しかし森林限界に出てから、暑さに加えダラダラといつまでも続く上りがだいぶ堪えてきたようだ。草花の写真を撮るなど座り込むことが多くなり口数も減ってきた。久し振りだもの。今日の宿泊を『太郎平小屋』にしておいてよかった。

１３時、太郎平に到着。今日はここまでなので飲んでもいいだろうと太郎平小屋の生ビールを注文した。ジョッキを手にザックを置いたベンチまで戻ると

「やっぱそうだ。マスクしてるからどうかなと思ったけど、帽子取ったらそうだと思って。」

山の会のＯＢのＫ尻さんが声を掛けてきた。Ｋ尻さんは昔会に所属していたが今は富山在住で、今回は山岳パトロールの仕事でこちらに来ている。事前にこちらに来ることを連絡したらうまいこと仕事の日程を合わせてくれたのだ。

Ｋ尻さんの勧めでＨ麻は太郎平小屋名物の“太郎ラーメン”を注文した。ギョウジャニンニクが入っていて美味しそうに食べていた。

「一応仕事なんで今晩は時間ないけど、明日なら（一緒に飲む）時間が作れそうなん

で」とK尻さんが言った。

受付を済ませ小屋に入った。当然マスク着用である。寝床は縦二段になっていて、横は壁で４人分に仕切られている。そこを二人で広々と使わせてもらうのだ。みんなカーテンを引いて中に籠っており、なんだか蚕部屋のような感じである。

一休みしてからスケッチブックを持って太郎山に向かった。薬師沢小屋で働いているイラストレーターのやまとさんが太郎山の頂上から太郎平小屋を描いた素敵な絵があるのだが、それと同じ構図を描いてみたかったのだ。
ところが太郎山に着くと有峰側から湧き出した雲が先ほどまで見えていた薬師岳を消してしまった。仕方ないけれど見えている景色だけ描くことにした。H麻が色を塗り始めると雲は手前まで迫ってきて何と太郎平小屋まで消し始めた。
「あーぁ、色がわからない」と終わりになった。

夕食の席は向かい合わせではなく斜めにずれて着席する。混雑がないので我々としては余裕があってありがたいのだが、山小屋に対しては申し訳ない気がする。

先ほどの雲が流れてまた薬師岳が見えてきた。富山湾の方から夕陽が射し太郎山に赤みを加えている。寝床の細い窓から景色の色の変化を一緒に楽しんだ。

Ⅱ．薬師沢小屋から赤木沢へ

朝日の中、６：２０に小屋を出発した。今日も天気は良さそうだ。K尻さんは小屋の掃除を手伝ってから薬師沢へ向かうとのことで午後に一緒に釣りする約束をした。

急な斜面を下りきって薬師沢側の木道を歩いて行く。ベンチのある開けた草原に差し掛かった時だったか「植生が変わったね」と言われた。２０年以上通っていても気にしたことがなかったが、そう言われてみればと周りが新鮮に見えた。

カベッケヶ原に出ると正面に針葉樹の緑が形作る巨大な台形が目に迫る。雲ノ平だ。
「明日大丈夫そうであればあそこを上がってみたいんだよね。」

８：５５、薬師沢小屋に到着。マスクはしているが、小屋番のA塚さんややまとさんの変わらぬ笑顔にホッとする。今年もここに来れて良かったな。
乾燥室に荷物を置かせてもらい沢支度を整えた。今日はこれから赤木沢出合を目指して行く。できれば赤木沢のＦ３くらいまでは行ってみたいと思っている。
ヘルメットを被りシュリンゲをたすき掛けにしたH麻を見てテラスにいた女子が「えーっ？沢行くんだ？カッチョイー」と言った。本人は久し振りの沢歩きで相当緊張していたのだけれど。

白い巨岩とエメラルドグリーンの流れ。やはり黒部は魅力的だ。流れが右へ折れて少し行くと、早くも竿を出してみたくなってしまった。何投かするとクッと手応えがあり元気なイワナが顔を出した。ますます黒部は魅力的だ。
自分だけ楽しんでもいけないのでH麻に真似事をさせたところチビちゃんを釣り上げた。なんと！まあこのくらいにして先へ向かおう。

一度渡渉して右岸を進んで行く。どんどん進もうと思っていたが、やはりちょっとだけ竿を出したい所はあるものだ。時々ちょっとだけ休んでもらうことになる。

ほぼ直線だった流れが右に折れる。渡渉を２度して岩場をへつると『天然の釣り堀』手前のクランクに入る。
ここから左岸へ渡らねばならないのだが、足場にしたい一歩目の岩が白い水流に洗われている。取り敢えずそこを越えて先の様子を見に行ったが、その先は点在する岩を飛んで行かねばならずちょっと難しいかな。実際に見てもらうために水流に洗われた一歩目の岩だけ越えてみるように言ったがどうも足が出ない。ここが越えられれば赤木沢出合のあの景色を見せられるのだけれど。
でもまあしょうがない。ここで引き返そうということになり写真を撮って戻りかけた時、クランクの出口の所で越えられそうなポイントが目に入った。

岩の配置でＶ字に絞り込まれた２歩分の急流を越えねばならないが、シュリンゲで確保すれば何とか行けそうじゃないだろうか。
「えーっ、行けるの？」と言われたが、行けるんじゃないだろうか。
深さは腰まで、勢いよく２歩分向こう側の岩に抱き付くようにして急流を越えた。
「大丈夫、行ける。」
シュリンゲを出して掴ませ足場を伝えて短い距離で渡るように言った。意を決してＨ麻が足を踏み出した。が、しっかり足場を確保したかったらしく体を上流側に寝かせたために肩から水流を受ける状態に一瞬なった。
「そのままこっちへ。」
素早く渡らせたつもりだったが上半身まで濡れてしまったので表情はこわばっていた。

『天然の釣り堀』の高巻きを上がり切ると荒々しい流れの先に赤木沢出合が見える。
「ほら、あそこ。」
さらに左岸の岩場をへつったりしながら１１：４５、赤木沢出合に到着した。どうにかお勧めの景色を見せることができた。幅広の滝からスダレ状に落ちる白い水流が緑色にたゆたうこの景色は毎年必ず目にしたいものの一つだ。

ここで少し休んだ後、今回は赤木沢に入りＦ３の滝まで連れて行きたかった。しかしＨ麻の表情が晴れていない。
「ここまででいいよ。だって帰りもさっきの所通るんでしょ。低体温症になっちゃうよ。他にルートは無いの？」
さっきの急流の渡渉が不安となって頭に残っているのだ。遡行図にあった高巻きのルートを望まれた。かつて通ったことがあったが１度だけだったのでうろ覚えだ。
出合から引き返し先ほどの高巻きの取り付きまで戻る。左岸を上がって行くはずだが見上げると足場が悪そう。やはり先ほどの無理やりの渡渉が一番シンプルなのだが顔色を窺うとありえない。
取り敢えず左岸を上れる所まで上がってみた。しかし先がズブズブ崩れるため首を振って引き返した。
次に目を付けたのが左岸沿いに伸びる岩棚だ。途中で切れ落ちていてその下は淵になっている。濡れるのは嫌だろうなと思ったがこの下へゆっくり下りるしかないか。

残置シュリンゲがぶら下がっていたが頼れそうにないので使わず足元の丸い岩盤を抱きかかえて下へのショックが少なくなるようにして飛び下りた。ジャッポーン！胸下までの深さだった。そこから見上げるとH麻が大笑いしている。どうも岩棚から飛び降りる時の真面目な表情が可笑しかったらしい。
濡れても急流でなければ心配なかったようでH麻も無事下に落ちて来た。後は河原歩きで小屋まで戻るまでだ。

中州の所でK尻さんが小屋の従業員の女の娘に釣りの手ほどきをしていた。１５時までは付き合うとのことなので小屋で待ち合わせすることにした。
それならと途中で竿を振ってから小屋へ戻りテラスで遅目の昼食を始めた。

テラスには登山客の他にＴシャツ姿の顔の大きな賑やかな人がいた。
「私は釣り目的で来てて、何がいいんだか今日からここに５泊するんですよ、ワッハッハ…。毎日釣りすると２００尾くらい釣っちゃうのかな、ワッハッハ…。３日目くらいになると同じ魚が釣れちゃったりするんだよね、ワッハッハ…。」
ある種典型的な釣り人であった。この人もこの小屋の常連の一人らしい。

さて、K尻さんが戻ってきたので一緒に薬師沢へ向かった。そもそも昨年山スキーに行った時に釣りの話しになり、今度一緒に行きましょうと話したのがきっかけだ。K尻さんも釣り方はテンカラで、お互い毛鉤を打って行く。
「Ｈ口さんとついに釣りが出来て感慨深いものがある」と言ってくれた。

沢が折れる所の大きな落ち込みでいい型が釣れた。こっちを見てK尻さんが「おぉ」と言ってカメラを向けた。
一方、K尻さんは瀬を熱心に攻めている。師匠からの「すべてのポイントを攻めよ」という教えを忠実に守っているそうだ。
ラインを竿にからませてから休んでいたH麻であったが、ちょうど魚が出そうな溜りがあったので竿を渡したらまたまたチビちゃんを釣り上げた。なかなかやるじゃない。
小屋の夕食時間に間に合うように、早いけれど１６：３０には釣りを終えて戻ることにした。

薬師沢小屋では二段になっている寝床を布団１枚分ごとにビニールのシートを上から垂らして区切っていた。こうまでして頑張ってくれているのだ。ありがたいなと思う。今年の事は忘れない。

今日だけは自炊である。本流と薬師沢で１尾ずつキープしたのでH麻にイワナの唐揚げをご馳走することができた。それと後はレトルトでカレーライスだ。普段釣り仲間と過ごしているスタイルをそのまま味わってもらった。
その後、食事を終えたK尻さんが入ってきてお楽しみ飲み会が始まる。他に自炊の人が居なかったので自炊室を我が物顔で使わせてもらった。
たっぷり話した後、寝床に戻るとちょうど消灯の時間となり、灯りと一緒に発電機の音がすーっと消えた。

Ⅲ．雲ノ平を往復

翌朝、イワナ汁とお茶漬けで簡単に朝食を済ませ７：０５に小屋を出発した。もちろん他の人達はとうに小屋を出ている。でも今回の旅のテーマは“のんびり”だからこれでいいのだ。
「今日は天気がいいから眺めがいいじゃろう。帰ってきたらまた釣りでもしよう」
とK尻さんが見送りしてくれた。

吊り橋を渡って対岸へ、そこからもう急登の始まりである。K尻さんからは「丸い岩のいやらしい道」と聞いていたが、俵くらいの大岩が積み重なった急登であった。湿った大岩は滑りやすく下から上がるのも大変だが、上から下りて来る人達はさらに難儀のようだ。
このきつい急な上りが２時間くらい続くらしい。H麻の様子を伺いながら上がって行くが頑張ってくれている。暑い上りのさなか、スーッといい風が吹いて来た。
「あぁ、いい風だ。頑張れ頑張れって吹いてくれたんだな。」
「えへえへ、…そんなことないよ。」
再び寡黙になって上がって行く。

上りの角度がゆるくなってきた。もう少しだろう。そしてようやく木道が出てきた。上に被っていた木々がなくなると薬師岳が見えた。「おぉー！」
９：１５、開けた場所に出ると『アラスカ庭園』と標識があった。針葉樹に囲まれたこの場所に付けられた名前である。ザックを下ろして一息つく。

高いハイマツの間に続く木道を行く。ハイマツが薄くなった所にベンチがあり『奥日本庭園』とあった。水晶岳の奥には赤牛岳の姿が見える。
小腹が減ったので草餅を渡すと、H麻がベンチに寝そべり何やら腕を上に伸ばしている。何しているのか聞いてみると
「青空と草餅の色が合うなぁと思って」だと。
雲ノ平には『〇〇庭園』と名付けられた場所がいくつもある。それぞれに何かしらの特徴があるのだ。
「じゃあ庭園巡りでもしますかぁ。」

ハイマツに代わって木道の周りは草地となってきた。
「あぁ、あたしは草地の方が好きだなぁ。」
広い緑の台地に白い木道が折れ曲がっては伸びている。鷲羽岳、ワリモ岳も見える。途中から黒部五郎岳が大きく見えてきた。そして北鎌尾根、笠ヶ岳、槍ヶ岳もわかる。ここ雲ノ平は名だたる山に囲まれた楽園だ。

分岐になり左は雲ノ平方面、右はアルプス庭園方面とあった。庭園ハンターは右の木道を選んだ。道は次第に上りとなる。振り返って見ると特徴的な形の雲ノ平山荘が水晶岳をバックに建っているのが見えた。いい眺めだ。
しかし道はまだ続く。結局着いたのは小高い祖母岳の山頂、標識には『祖母岳山頂（アルプス庭園）』とあった。
いやいやそれにしてもここは素晴らしい眺めだ。赤牛、水晶、ワリモ、祖父が連なるパノラマ。今回の“めっけもん”であった。

アルプス庭園から雲ノ平山荘を通りすぎるとその辺りが『ギリシャ庭園』である。グレーの岩石が散らばる中を木道が走っている。
雲ノ平キャンプ場への分岐にあるベンチでは正面にでっかい水晶岳が聳えている。この辺りの眺めが『スイス庭園』であろう。ランチはスイスでとることにした。天気が良くて静かで伸び伸びとしていて本当にありがたい。

１２時になって往路を引き返すことにする。急な下りを前に『アラスカ庭園』でコーヒー休憩を取ることにした。
ベンチで同じ歳くらいのご夫婦と一緒になった。快活な奥さんと顔色の悪いご主人。昨日は雲ノ平山荘に泊まったそうで、僕らは昨日今日と薬師沢小屋泊まりだと言うと「ほな一緒やね」と明るく言われた。

さて、下りに取り掛かる。大きな岩の下りだから足腰に負担がくる。ゆっくり慎重に黙々と頑張ってもらうしかない。朝方に比べて岩の湿り気が無くなっているのが救いである。

黒部川の流れが下方に見えてきた。１５時、薬師沢出合まで戻る。ここから見上げる吊り橋と薬師沢小屋、そして緑色の流れが一体となった眺めはやはりいい。H麻もカメラを取り出し何枚も写真を撮っていた。
「この（流れの）緑がねぇ。」

小屋の前のテラスにK尻さんが座っていた。お待たせしたが釣りはと思ったら
「いや、焼酎飲んじゃったんで今日はやめとく。」
今日は小屋番さんと一緒に大東新道のＣ沢の崩れた所を下見に行ってその帰りに２時間くらい竿を出してきたそうだ。
「今日は全然釣れんかった。よかったら行って来て。」
エメラルドグリーンの流れを見て釣りがしたくなっていたのだけれど、話していたらだんだん時間が無くなってきた。今日は小屋の夕食を頼んでいたのでこれから準備してもせいぜい３０分くらいしか時間が無い。もういいや僕もビールを飲んじゃおう。良く晴れたテラスで過ごすのが気持ち良くて、すぐに２本目を頼んでしまった。

１７時になって食堂へ行った。２０年以上ここに通っているが、食事を頼むのは初めてだった。今晩のメインは角煮で煮物や蕎麦など品数も結構あった。美味しかった。これもやまとさんの作品なのだなぁ。ちなみに食堂でも向かい合わせの席の間にビニールシートが垂らされていた。

食後、H麻は「全身筋肉痛」と言って早くも寝床に戻ったが、僕はK尻さんに誘われて小屋のメンバーと飲むことになった。その中にはあの顔の大きな釣り人もいた。Ｉさんと言ってドライフライを使っている。今日は薬師沢の右俣で６０尾くらい釣ったそうだ。ワッハッハ…。

夕食前にＩさんが吊り橋から竿を出してイワナを釣り上げたという話しになった。最初は見向きもしなかった魚が他の魚が寄って来た時に急にパクッと咥えたそうだ。竿を持ち上げたが手が届かずイワナはラインの先でぶらんぶらんしたままだったそ

うだ。テラスに居た人たちはそれを見て大笑いしていたそうだが、ちょうど受付に居たやまとさんは「何やってんのよ！」と駆け出しイワナを鉤から外して逃がしてやったそうだ。
「だってイワナが可哀相じゃない。この“尺顔！”」
「ワッハッハ…。俺よりＫ田さんの方が顔大きいと思うよ。」
　その人もここの常連らしいが大きな顔が浮かばない。

　やまとさんが出した本『黒部源流山小屋暮らし』の話しにもなり、本に書けなかった裏話しなども聞かせてもらう。あっという間に消灯の２１時になってしまった。

Ⅳ．雨の下山

　小屋の朝食を終え出発の準備をする。小屋の前でＫ尻さんと一緒に写真を撮っていたらやまとさんが出て来てみんなで写真を撮ろうと言ってくれた。ケンさんが薬師沢小屋の看板を持って来てドンと置いた。小屋番さんが仕事の無線を終えるのを待ってみんなで写真を撮った。
「この写真は薬師沢のアルバムに載せます」とやまとさんが言った。なんて嬉しい事。

　ちなみに無線は宿泊キャンセルの連絡であった。このわずかな間にコロナの感染者が増え、愛知県では県外への移動が禁止になったそうだ。しばし頭から離していたが、東京はどういう状況になっているだろう。

　６：２０、小屋を出発。小屋のすぐ横の急登を上がって行く。姿が見えている間、みなさん手を振って見送ってくれた。
　昨日までの天気とは打って変わって空は降り出しそうな色合い。カベッケヶ原から振り返った雲ノ平は雲に覆われている。
　カベッケヶ原を越えてからポツポツと雨が落ち出した。木に覆われた所でザックカバーとレインウェアを取り出した。開けた場所に出たが近くの稜線も雨に煙っている。

　第一渡渉点の橋を渡って一本入れてから本日の試練である２５０ｍの急登に取り掛かる。疲れないようにゆっくり行こう。
　いつもなら振り返ると雲ノ平を巡る山々の眺めが目を楽しませてくれるのだが、今日は白く包まれただけである。
　途中で後から出発した例の夫婦が追いついて来た。雲に隠れた雲ノ平の方を見て
「雲ノ平が昨日で良かったですね」と言ったら
「ホンマやね。今日はもうどうでもエエわぁって感じやね」と奥さんが快活に答えた。道を譲って先に行ってもらった。

　薬師沢小屋の無線で「太郎平の視界５ｍ」と聞いていたが、小屋が目に入ったのはほんのすぐ手前まで来た時であった。いきなり見えてびっくりするくらいだった。
　雨が強かったので軒下のベンチは一杯だった。仕方なく外のベンチに荷物を下ろしたら、快活な奥さんが手を振って「こっちこっち」と呼んでくれた。
「うちらもう食べ終わったからここいいよ」と軒下の場所を空けてくれた。袖振り合うも多生の縁、いやいや多分な縁をいただいた。

行動食を口にして、雨が幾分落ち着いた頃合いを見計らって下山に取り掛かった。
往路で示した目印を伝えながら黙々と下って行く。三角点から下の段差の大きな下りではＴ型のダブルストックが役に立った。

１３時、折立に到着。不安だったＨ麻の足腰も何とか頑張ってくれたようだ。雨は納まっていて、臨時駐車場までの道をのんびり歩いた。
想像以上に歩かせてしまったようなので恐る恐る聞いてみた。
「あのさぁ、今回いわゆる新婚旅行じゃない。よく海外から帰って来るカップルの中に“成田離婚”なんてあるけれど、“折立離婚”なんて無いですよねぇ？」
するとＨ麻は
「わかんないよぉ～」といたずらっぽく答えて明るい笑い声を立てた。

（Ｈ口 記）